

あなたの「美術館デビュー」は何歳の時だったか、覚えているだろうか。東京国立近代美術館では、「四歳からのギャラリートーク！ 家族といっしょに美術館デビューしよう」をキャッチフレーズとした鑑賞プログラム「おやこでトーク」が、二〇一四年夏にはじめて開催された。幼児とその保護者を対象「註1」とした本プログラムは好評を博し、現在は年数回の頻度での継続開催を目指しているところである。本稿では、プログラム「おやこでトーク」を通して、幼児と大人がともに鑑賞する姿について考察してみたい。

参加者の視点から

まずは「おやこでトーク」がどのようなプログラムなのか、参加者の視点からその流れを追ってみよう。

二〇一六年一月、Aさんは五歳になる娘のBちゃんと「おやこでトーク」に参加した。エントランスには絵本、パズルなどが用意され、受付をすませた参加者たちが思い思いに過ごしている「図1」。Bちゃんはパズルを手にとり、比較的リラックスタ様子で過ごした。

プログラムが始まると、保護者向けの概

要説明と、子ども向けのイントロダクションがある。本日は三つの作品を鑑賞し、参加する子どもは鑑賞のたびに一枚ずつ、計三枚のカードをもらえる。もらったカードは、受付で渡されたカードホルダーに入れて持ち帰ることができる。そして、美術館でのマナーとして、歩く時は保護者と手をつなぐこと、作品にさわらないこと、スタッフが「しー」と口元で指を立てたら静かにすることを確認した。Bちゃんは、カードをもらえることに興味を引かれたようだ。この日は四組の参加者がグループとなり、AさんはBちゃんと手をつないで、展示室へと向かう。

最初の鑑賞作品は、岸田劉生の《麗子肖像（麗子五歳之像）》。ハイライトコーナーの壁の色は暗く、静かな空間にBちゃんをはじめ子どもたちはやや緊張した様子だ。「麗子ちゃんをおうちの方へ紹介してみよう。おうちの方へ、お子さんが話しづらそうだったら、何歳くら

いかな」とか、「どんな遊びが好きな子なのか」と質問をしてあげてほしい。」というスタッフの声かけで、鑑賞がはじまる。AさんがBちゃんにこの子は何歳くらいだろうと話しかけると、「自分よりちっちゃい気がするから、……三歳くらい？」と答えながら、Aさんにぴったりとくっついて甘え始めた。その後、それぞれどんな話をしたかを保護者が話し、グループで共有する。他の参加者では、「年齢は五歳くらいで、さようどいがあるかな、と話した。お姉ちゃんがいそう」などの話があったようだ。「じゃーん！」「掛け声とともに額縁が登場した。「麗子ちゃんのように額縁に入って、今度はみんなが自己紹介をしてみよう。」参加した子どもたちは人前で話すことには慣れていないのか照れた様子で、



図1 エントランスで待機する参加者



図2 額に入って自己紹介する参加者



図3 柳原義達《道標（風と鴉）》の鑑賞



図4 休んでいるクラスのポーズ（左）、羽（腕）を動かしている（右）

スタッフのインタビューに答えたり、保護者の助けを借りたりしながら自己紹介をした「図2」。最後にカードをもらい、大事にホルダーにしまつて鑑賞を終える。

次の鑑賞作品は彫刻だった。子どもたちは立体作品に興味をもったようで、保護者と手をつなぎながら柳原義達の《道標（風と鴉）》を見る目はなかなか真剣だ「図3」。「鳥だ」「カラスかな」「インコかな」などと吹き、親子での会話はさきほどより活発だ。AさんもBちゃんと話しながら作品のまわりを一周し、カラスの尾もよく見た。

グループ全体での鑑賞でも、スタッフの声かけに単語で返すなどやり取りができるようになってきた。モチーフであるカラスは子どもたちにとって身近な存在であるようだ。Bちゃんも、鳴き声をたずねら

れ「カー、カー」と声真似をして答えた。

カラスになったつもりで羽(腕)を動かす活動や、羽を閉じた「休んでいるカラス」のポーズもした「図4」。Bちゃんはこの活動には積極的で、腕を動かしながら歩き回り、飛んでいるつもりを楽しんだ。「休んでいるカラス」のポーズでは、どちらの足が前か、作品を確認しながら調整した。「風が吹いてきたよ！ふんばってみよう」とスタッフがうちわを取り出して風を起こしたとき、AさんはBちゃんに向けて「ビュービュー」と風の音を声にして語りかけた。Bちゃんも「ビュービュー！」と口ずさみながら活動を楽しんだ。とがった口はカラスの嘴のように見える「図5」。活動を終え、最後にもう一度作品をよく見ながら一周。カードをもらって、次の作品へ向かう。

三つめの作品は、桂ゆきの《ゴンベとカラス》。この作品でも、まずは親子での鑑賞の時間をとる。スタッフは、「おうちの人は、ぜひお子さんの目線でも見てみてく



図5 「ビュービュー！」と口ずさむ

ださい」を声かけた。目線の高さを合わせ、鑑賞すると、静かな声でも会話が弾む「図6」。AさんとBちゃんの話では、画面中央にいるカラスが右上にいるおサルさんと話をしているなど物語が生まれた。

グループの対話では、子どもたちがそれぞれ見たこと話したことを発表した。「カラスがトンビにねらわれているところ」、「狩りにいくところ」、「大人の鳥と、子ども

の鳥がたくさん」などのお話をした子や、「カラスの足(指)は四本だった」、「カラスさんのお目々が黄色」など詳細な点が



図6 桂ゆき《ゴンベとカラス》の鑑賞

エントランスへと向かう子どもたちの足取りは軽く、最初の緊張が嘘のようだ。保護者たちも、当たり前のように手をつなぎ、子どもに語りかけていた。

プログラムのねらいと構造

本プログラムは、ふたつのねらいを設けて開催している。①幼児が美術館に親しみ、鑑賞を楽しむこと。②家族での美術館

来館をうながし、次回来館時に向けて鑑賞コミュニケーションのきっかけをつくること。これらのねらいを受けて、一般的なギヤラリートークの形式に「幼児が親しみやすい活動」、「親子での活動」を取り入れている。「幼児が親しみやすい活動」として取り



図7 カラスの目を動かす

入れているのは、主に非言語的活動である。色や形に着目した補助ツールの使用、ポーズをとる身体活動などがある。先述のAさんとBちゃんが参加したプログラムでは、自己紹介をした額縁やカラスの表情を変えるツールが用いられ、彫刻作品で

は身体活動が取り入れられていた。他にも、色に着目するマグネットツール「図8」などを用いて、それぞれの作品に合わせた方法をとる。言語的な活動においても、絵本の読み聞かせ「図9」、オノマトペ(擬音語、擬態語)の使用、子どもたちの日常生活や経験に沿った対話を用いるなどの配慮をして進行する。

「親子での活動」もさまざまな形で取り入れられている。ツールの使用や身体活動を親子で行う場合もあれば、親子での対話を促すこともある。幼児の語彙は多くはないが、普段生活を共にしている保護者は、子どもが話す内容をよく理解できる。子どもが一番リラックスして話せる相手でもあ



図8 作品の中にある色を探す

ねらいに沿った手法の他に、本プログラムの特徴的な点がいくつかある。三枚のカードを集めるオリエンテリング方式、移動の際に必ず保護者と手をつなぐこと、身体活動以外

は座布団や折り畳み椅子などの座る場所を用意することなどだ。オリエンテリング方式は、幼児がプログラムの全体



図9 絵本の読み聞かせ

は座布団や折り畳み椅子などの座る場所を用意することなどだ。オリエンテリング方式は、幼児がプログラムの全体

像を把握しモチベーションを維持する効果を生む。手をつないでの移動・座る場所の確保は、作品保全や他の来館者への配慮から設定したが、幼児にとっては、すぐ隣に保護者がいることや、自分の居場所が座布団などの見える形で存在することは、はじめての場所での「安全な居場所」をつくる働きもしているようである。

美術館で「あそぶ」こと

本プログラムで取り入れる活動の多くは、子どもたちには「遊び」と捉えられる。幼児の経験では、「作品そのもの」と「作品をとりまく空間・時間・一緒にみる人・作品を鑑賞するための活動」を切り離すことはできない。「作品そのもの」について鑑賞を深めた経験よりも、「美術館で遊んだ」という活動の全体像を経験として持ち帰ることになるだろう。

一方で、これらの「遊び」は「所蔵品ガイド」²を日々行っている経験豊富なガイドスタッフによって提案され、教育普及担当研究員による確認を経た鑑賞活動でもある。そこには「作品そのもの」についてこだわった「鑑賞を深める」ためのエッセンスが土台にある。幼児は「遊び」の中で、一鑑賞者として作品と関わっているのだ。

「大人はキャプションに目がいつてしまうのですが、子どもは作品と直に触れ、その年齢ならではの感想を言葉に出すのが

スゴイ！と思いました。」アンケートに寄せられた感想だ。幼児が作品と関わる接点は、わずか数年間の生活の経験と、作品のもつ物質的・造形的な要素がほとんどの割合を占める。大人はむしろ、作品の主題や歴史的背景について目を向けがちであるため、幼児が親しみやすい鑑賞活動が、大人に新たな鑑賞の視点を与えることもある。本プログラムは、幼児が家族とともに美術館に親しむきっかけをつくるとともに、保護者にも鑑賞を深める機会を与えることができる、文字通り「幼児と保護者を対象とした」プログラムといえるよう。

継続をめざして

プログラムを開催していつも驚くのは、たった一時間で参加者の様子が変化することである。はじめての環境に緊張している参加者たちが、三作品目のころには自然と部分を指で示しながら対話するなど、リラックスして鑑賞できるようになる。後半、案内される作品以外について自然に対話が生まれる様子もよく見かける。

参加者アンケートでは、幼児も保護者も九割が「楽しめた」と回答しており³、参加者による評価でも満足度が高い傾向が高いプログラムであるとわかる。同アンケートの記述では、はじめは美術館という場に緊張していた子どもが徐々に自然な

姿をみせた様子が伝わる。意見や、「美術館を子供とまわる時、どの様に言葉がけしたらよいか、参考になりました」のように、家族での鑑賞のきっかけを得たというご意見もいただいている。本プログラムは、ねらいをおおむね達成しているといえよう。

「おやこでトーク」の初開催以来、プログラムの継続を求めると意見も多い。参加の動機はさまざまであるが、「子どもに美術や美術館に親しんでほしい」「親子で参加できるプログラムだから」などが多いなか、「普段は子連れでは美術館に行きづらい」という理由もある⁴。子どもがうるさく騒いでもあったり、作品を壊してしまったりして迷惑をかけないかと心配がつきないのだろう。子どもを連れてくる大人にとつて、美術館は歓迎されない場所であると感ぜられていることが少なくないのだ。

「なかなか初めて会う人・場所で、自分の意見を言うことができない子なので、優しく丁寧に話しかけていただき、安心感を持たせよう、最後にはいつもの様子を出せるようになりました。」というご感想からは、スタッフの来館を歓迎する気持ちや、声のかけ方などで伝わったことがわかる。本プログラムは対象者や内容による制約上、一度に多人数を受入れることはむずかしいが、定期的に継続して開催していくことで、美術館が彼らを歓迎しているという意志を示す一歩になればよい

註 1 年中～年長（四～六歳）の未就学児と十八歳以上の保護者を一組とし、参加者は各回十五組三十名程度（抽選）。

2 開館日の毎日午後二時から行われている、対話を用いて所蔵作品展を鑑賞するガイド。一般来館者（大人）向け。

3 二〇一四年から全八回開催分の参加者アンケート。保護者が記入、回収数一〇一。

4 二〇一六年一月開催の本プログラム参加者アンケートより。アンケート回収数三十一。

次号予告 2016年6-7月号 6月1日刊行予定

現代の眼 618

声ノマ 全身詩人、吉増剛造展

Review

恩地孝四郎展

安田鞞彦展

芹沢銈介のいろは——金子量重コレクション

2016年4月1日発行（隔月1日発行）現代の眼 617号

編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館／美術出版社

制作：美術出版社

発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話03(3214)2561

表紙：安田鞞彦「居醒泉」1928年 絹本彩色 117.5×174.5cm 個人蔵

MOMAT支援サークル

木下グループ 三菱商事 鹿島建物 Marubeni